

私は、住職を務めるかたわら、保育園の園長をしております。現在の保育園は、子育て支援という名目のもと、様々な事業を行っております。乳児保育、一時預かり保育、休日保育、学童保育・・・といろいろな形の特別保育がありますが、今回は、その中のひとつである延長時間保育についてお話をさせていただきたいと思います。

私の保育園では延長時間保育として、朝7時から夜7時までの12時間保育を実施しております。いまや、両親がともに仕事に就かれる、いわゆる共稼ぎの家庭が増えてきており、また、核家族化が進んでいる影響もあり、両親以外の保護者が家に誰もいない家庭も増えております。そういった状況下での保育園に預けられた子どものお迎えは、両親のどちらかが仕事を終えてから保育園に寄られるわけですが、そうなるとお迎えの遅い家庭のお迎えは夜の7時過ぎということもあります。

親は、仕事で疲れ、急いで子どもを迎えにきて、帰宅後は夕飯の準備、お風呂の支度、就寝準備、子どもを寝かしつけてからは、洗濯、明日の準備と目の回るような日々だと思えます。そんな中、保護者が保育園にお迎えに寄られた時に、ほぼ毎日とっていいくらい垣間見る光景があります。

暗くなってから急いで迎えに来る保護者に対して、子どもたちは待ち侘びたかのようにうれしい顔をして飛びつくわけでもなく、また、今まであそんでいた積み木や絵本を急いで片付けるわけでもありません。急いでいる保護者に逆らっているかのようにゆっくりと帰宅の準備をはじめ、あげくの果てには、外に出てから真っ暗い園庭にあるブランコを押して欲しいとせがみます。

お迎えに来た保護者からすれば、これから家に帰り、先程挙げたように一分一秒を惜しんでやらなければならないことが山積みです。

「お母さん急いでいるからまた今度ね。」

とやさしく言っても子どもは聞きません。

「お家に帰ってご飯の準備があるから。」

と叱って言っても聞きません。

『親の思い子知らず。』とはよく言ったものです。

しかし、逆にいえば『子の思い親知らず』ともいえると思います。

忙しいという字は、立心べんに亡くなると書きます。もし、自分が送っている生活が、字の成り立ちどおり忙しさに縛られた心の亡い生活だとすれば、こんな悲しい生き方はありません。また、心が亡い親では、子どもも理解してくれなくて当然です。

「一期一会」ということばがありますが、今日という日は二度とめぐってはきませんし、もっというなら、今生きているこの瞬間も二度とめぐってはこないのです。一度しかない、やり直すことができない人生です。忙しい中でも、心のこもった、あたたかい人生を送りたいものです。